

未来への伝承

134

旧中城町の山車人形

今年の夏も市内各所で祇園祭のお囃子が響き、大勢の人々が山車や屋台をひく光景が見られました。山車の中には、歴史的な物語を題材とする大型の山車を乗せるものも見られます。このような山車と一体となつた人形を山車人形と呼びます。

博物館の収蔵資料には、旧中城町(現中央一丁目)が所有した、山車人形があります。長年にわたる使用で傷みが目立ち、改変のあとも見られますが、町の人々が愛着をもつてこの人形に接してきた様子がうかがえます。

博物館では、この資料の重要性と多くの方に良好な状態で見ていただくため、平成26年から修復事業を行ってききました。

この山車人形は、平成6(1994)年9月に中央一丁目地区から寄贈されたもので、木造の二分分の頭や一分分の腕などが残ります。興味深いことに、寄贈以前に頭内部から取り出された貼り紙には「明治八歳乙亥三月 泰精齋 古川長延作」と書かれ、頭を収納する古びた木箱の蓋には、表に「源三位頼政公猪俣太 御頭」、裏には明瞭に「明治八乙亥年四月 中城町」と墨書されています。

党の隼太(『平家物語』では早太として登場)とともに、頭は猿、体が狸、手足は虎、尾が蛇という妖怪・鶴をしとめるというお話です。

もともと、これらの山車人形が山車の最上部でどのような飾られていたのかについては、明治39(1906)年の祇園祭の時に撮影された古写真が参考になります。頼政は烏帽子をかぶり、公家風の衣装で腰に刀を帯び、直立しています。一方、隼太は太い眉に口ひげをたくわえ、鎧に身を包み、やや前かがみに短刀を振りかざしています。

先の貼り紙に記された古川長延は、文政9(1826)年生まれで、明治30年代末頃に没したとされます。江戸祭礼文化の終焉を飾る数々の山車人形を制作したことで知られ、江戸最後の山車人形師と称されます。明治33(1900)年に発刊された『千代田日報』には、75歳をむかえた長延の回顧録が掲載されています。そこでは、自らが制作した江戸・東京および周辺地域の山車人形についてふれ、土浦の頼政や隼太についての記述もみられます。



▲明治39年の古写真
(青年たちの背後に2体の山車人形)

この山車人形が今から140年以上も前の明治8(1875)年3月に、東京の人形師・古川長延によって制作されたことを示します。

この源頼政と猪俣太の山車人形の組み合わせは、平家一族の盛衰を描いた『平家物語』の一節で知られる、鶴退治の場面を再現するものです。その内容は、平安時代の末頃、勅命により、弓の名手として知られる頼政が真夜中の宮中において、郎



▶猪俣太の山車人形



▶源頼政の山車人形

発行 土浦市
〒300-8686 土浦市大和町9番1号
☎029-826-1111
E-mail info@city.tsuchiura.lg.jp
HP http://www.city.tsuchiura.lg.jp/

編集 市長公室広報広聴課
発行日 平成28年9月1日
人口と世帯数 14万0377人 5万7741世帯
(平成28年8月1日現在)

この広報紙は環境に配慮し、再生紙・植物油インキを使用しています。

スマートフォン用ホームページ▶



次回「広報つちうら」9月中旬号は、9月15日(木)発行予定です。